

第三章 錠前破り

1

白岩由吉が大きな犯罪を犯すことになるのは、二十も半ば過ぎた頃のことであった。筒井村浜田玉川の雑貨・質屋を営む佐貫幸助方に押入ったことが、のちの殺人劇にと結びつくことになった。

それまでにすでに、土蔵破りなどの罪で五回の逮捕歴があつた。

錠を開ける名人で、開けたら逃げる時にまたちやんと施錠した。それで何カ月も経ってから被害届が出ることもあつた。

彼は名人気取りで、いわゆる密室犯罪の真似事のようなことをやつたのだ。

質屋の蔵に押入り、逮捕、留置された時も彼は青森・大館署の留置所を例によつて針金一本で解錠し逃げた。鉄格子の一面が金網になっていて、その金網の一部を破つて、より合わせ、鍵を作つた。

留置所といつても板壁を叩き割れば外に出れるようなお粗末なものつた。

その時が三回目の逃亡であつた。

みんな青森署管内の留置所や刑務支所だつた。窃盗の罪は微罪だったが、青森署の高畑刑事は、警察の威信にかかわることだ

から、白岩を絶対に逮捕すべく地道な捜査活動をした。彼の交友関係を洗い、出入りしそうな場所に幾晩も張りついたりした。

そんなある日、高畑刑事は、白岩に関する情報を得た。

白岩と組んで土蔵破りをやったことのある古川という男が置引きをして、しよっぴかれた時、自分の罪を軽くしてもらうために、白岩のことを喋った。

白岩は、一カ月ほど前に、東京に出ていた。それが、錠前破りの修業に出たのだという。

高畑刑事は一度、東京に出たが、別に、白岩の犯行と思われる被害は出ていなかった。結局、警察回りだけをして青森に戻った。が、同じ頃、白岩は妙な名刺を持って、東京の大きな金庫店巡りをやっていた。青森県産業組合、経理課長、青柳敏光という立派な名前の男に変身していた。

青柳というのは実際に青森市内にある地名である。世は不況で、街には失業者が溢れていた。彼は東京でも多くのルンペンを見た。いつまでもチョロイ土蔵破りなどやっていても一旗上げることにはできないと思った。

頭の転換を彼は図ったのである。

銀行や、大きな会社の金庫を狙う一獲千金の夢を彼は頭に思い描いていたのであった。そのための、金庫の開け方、構造の研究である。青森県産業組合の経理課長が、金庫を買うために上京してきた図である。

彼は、ちやちな造りの金庫の弱点については指摘するだけの眼があった。

錠前破りの名人なのだから当り前のことだった相手側は、そんな時、すっかり仕事熱心な彼を信用した。

たっぷり時間をかけて、彼は解錠の仕方を会得した。共腹部分の構造、はね板、それにスプリングの作用、中には二重、三重の仕掛けになっているものもある。

七軒ほど回った末、購入を決めた。青森県産業組合だから全県下に支所があり、おいおい数を増やしていくと言ったので下にもおかぬもてなし、夜は小料理屋で減多にありつけぬ馳走を並べられた。

もちろん、すべて架空の話だから、見込まれたほうは無駄な出費ということになる。何種類もの金庫があったが、解錠法を習得し、彼は意気揚々と東京・上野駅から青森行の汽車に乗った。

ところが、青森駅では、高畑刑事がもうそろそろ地の利のある青森にもどって来る頃だと網を張って待っていた。

東京の警察を回ったお陰で、詐欺にあった金庫店からの情報が入り「二、三日うちに青森に帰る」と青柳こと白岩が話したのとまで耳に入った。

送金してもらおう都合があるので欺された会社は、青森市仲町の青森県産業組合に電話したがまったくの嘘だということがわかった。その情報入手した二日後に、烏打帽に、背広姿という珍らしい恰好の白岩が

青森駅の駅頭に現われた。

なにがなにやらわからぬうちに、白岩はまた手錠を掛けられてしまった。

「おめえ、日本一の金庫破りになる気だったんだべ。東京さまでわざわざ行って金庫破りの修業だど。立派な心掛けだのう。はは」

青森署の取調室に連行された彼はこの時ばかりは一言もなかった。

どこでどう話がつながったのか彼には皆目見当がつかなかった。

お上りさんの心境で、東京の街を自由に潤歩（かっぱ）していたのに、青森に着くなり、顔見知りの高畑刑事がやってきて手錠を掛けたのだ。

「だれが、タレ込んだんだべ」

もちろん高畑刑事が答えるはずはなかった。

「警察はな、いい奴ども悪い奴どもみんな平等に付き合ってるべき。今度だばまいったべ。悪いごとはできねっ」

「ああ、びつくらこいだア」

だが、白岩は平然としていた。

ここの留置所からまた逃げてやると頭の中では考えていた。

彼は一本の合鍵を手に使っていた。

いわゆるマスターキーというやつで、大抵の錠前なら解錠できるようになっていいる。鍵には一つの基本型があり、その基本型も何種類かに分れていたが、刑務所で使われている軽便錠は、以外とかんたんな仕掛になっている。

複雑な構造だと守りにはたしかに強いが

、故障が多いのだった。

かえって欠陥を生むことになる。

何度も留置所や拘置所、刑務所に入出入りしていたから彼は舎房の錠の構造はすでに知悉（ちしつ）していた。

その合鍵は靴下の中に入れていた。無警戒のままに、青森に帰って来たのではない。脱走犯である以上警察の眼が光っているのは当然だった。青森を出る時だつてわざわざバスで弘前まで行つて東京を目指した。まだ大館署の留置所から逃げて日数が経っていないからだった。

一月余経過していたので少し大胆に成りすぎたのだ。青森駅に着いたのは迂濶（うかつ）なことだった。

「ほんとだばごさおきたぐねだおん。まあだ逃げうだてられだりしたら大事はでな」

高畑刑事も逃走されることを心配していた。

だが、取調と手続きの都合上、すぐに青森刑務所に送るわけにはいかなかった。

もつともその青森刑務所も一度彼は脱けている。

まだ持物検査は始められていなかった。担当の取調官が来るのを高畑刑事は待っていたので、二人は茶飲話をしていた。

「あの刑事さん、おら、朝から腹が下つて便所へ行かせてもらえねえべか」

持ち物の柳行李（やなぎごうり）を彼は足元においていた。

「駄目（まい）ねえ、その術は桑名の焼き蛤だべさ。便所さ行けばどんなわるさするが知れた

もんでねは んでな」

「嘘でねはで」

殊勝に言い、白岩は柳行李を開けて、下痢止めの毒草丸を取り出した。手錠を掛けられたままだったが、器用に壇の蓋を開け、毒草丸を口に含み、茶で、のど元に流し込んだ。

「ほんとに、我慢できねはんでエ」

そこまで見せられては拒否することもなかった。合鍵の入っているのは右の靴下だった。大便所にしやがめば、高畑刑事からは奥の位置になり死角になることを彼は知っていた。

「おめえに、便所はあ、鬼門だあ、窓から逃げるねえな？」

「扉ごと半分、開げたままでいいはで、頼めすじゃ」

「よーし、二、三分ですませえ」

高畑刑事は、便所の扉を半開にさせ、扉のすぐ外に立った。

が、ほんとうに白岩は下痢をしていて、派手な音を立てたものだから、「かなわんなあ」と鼻をつまんで便所の入口あたりまで後退した。

彼は、東京で手に入れた合鍵をすばやく靴下の間から取り出し、すつきりしたところで、六センチほどの長さの丸い筒型の合鍵を肛門の奥に押し込んだ。何度か、針金なら油紙に包んで隠したことがある。それから、口中に残しておいたクレオソートの匂いのする毒草丸を尻の穴に詰め込んだ。

ちゃんと先の先を読んでいた。

何喰わぬ顔で、彼は、高畑刑事に礼を言い、便所を出た。

取調官が来て持物検査をされ、調書をとられた。留置所横の身体検査所で衣服をすべて脱がされた。

特に念入りに、この脱獄常習者は、隠匿（いんとく）可能な場所を調べられるはずだった。

が、足形のついた場所に両足をおき、脚を開いて、裸の尻を前につき出したこの男の異様な匂いに、係官は鼻をしかめた。

毒草丸のクレオソートの匂いがした。

本来なら中指の第二関節部ぐらいまでは挿し入れる。係官にも相手が脱獄常習者だから、その思いはあったが、さすがに止めた。

白岩は留置所内の雑居房に入れられた。

中年の男が一人いた。

密造酒を作ってパクられた近在の百姓の男だった。ムシヨ馴れをしている白岩にぺこぺこ頭を下げた。

この男は、白岩の挙動に不審なところがあればすぐに声をあげろと言われていた。その代り、密造酒を作った罪は許してやると言い含められていた。独居房では油断も隙もない。これも苦肉の策であった。

だが、白岩はピンと来た。卑屈な笑いをするこの男が犬に見えた。それで、はじめから脅しをかけた。

「おら逃げるはんで、おめも逃げてば？一緒

でもよし。ただ、おかしけど変な真似するでねえど。逃げる前におめの首ごと締めるはんでな」

相手にすつかり見透かされて、この男はもう黙ってしまった。

留置所は二十ほどあった。裏面に張りつくようにして造られているので、一列に十の居房が並んでいる。見張所からは、彼の入れられている居房がいちばんよく見える。相手も用心していた。

「なあ、担当さんよ、東京の女ごは面白えのよな。十九歳の女ごが接吻一回五十銭で、新宿の駅で接吻してで、捕まってしまったんだどう。消毒したガーゼごと口の中さ入れでの、接吻だべさ。銀座の裏通りでも、ほれ、銀ブラだべさ、と、つぎ合ってけれって、おなごが来て、そいでえ、暗がりですとチュツとやってるんだど」

「おめえも五十銭払った口があ」

「おらあ、吉原だあ、おいらん抱いてきただよ。はは」

「嘘こけ」

監視の警官の気持を先にほぐす術に出た。

「もう一つ、面白え話してやるべ。今度は男オンナの話だあ」

私語は禁じられていたが、白岩の話が面白いので若い警官は「ふん、ふん」と頷いた。

「ところは東京・渋谷の女湯だあ。毎晩女装して十八の男が、女湯に入るんだとお。女どもが訴え出て警察サマに御用だべさ。心は女子だのに女のほうで受入れでけね。この男才

ンナは、遺書を残しておつ死んじまったんだ
どう」

「どこまでほんとだんだがわがらねなア」
からかわれたと思つたのか、警官は眉唾
(まゆつば)ものだと、眉に唾をつける真似
をしてみせた。

「おら、長旅で疲れたべ、こういうときはさ
つさとねるべし」

午後九時に就寝時間になっていた。

刑務所とはちがうから見張番は一人しか
いない。

白岩は寝苦しそうに何度か寝返りを打っ
た。いかにも寝つけそうにないと言つたふ
うであつた。

が、真夜中の二時すぎ、白岩はほんとう
に疲れていたのか、いびきを立て始めた。
時折り、びきは止まる。

彼は演技をしていたのだ。

まだ四月のはじめのことで、舎房の中は
寒かった。熱いお茶を若い警官はさつきす
すつた。便所に行く回数を数えていた。も
どつて来るのも早い。二回行った。

が、いびきをかいていた時にはもどるま
でに五分ほど要した。当直室に行き、一杯
の熱い茶を淹(い)れてきたのだった。

その一部始終を、白岩は薄目を開けて見
ていた。相変らずいびきをかきながら。三
時半すぎの頃だった。

いびきをかいている彼を、監房の近くま
できて見張り番の警官は覗き込んでいった。
彼は狸寝入りしていた。

安心したのか便所に立った。二、三步、歩き出した時、男の手に湯呑茶碗が握られているのが彼の視野を掠めた。

チャンスだった。同房の男は、こちらはほんとうに寝入っていた。

鉄格子だけが、眼の前には並んでいる。留置所の扉の錠まで手を伸ばすのはわけはなかつた。

隙間から手を伸ばせばいいのだった。

逃げるまでに三分と彼は読んだ。

毛布を体に掛け、眠りについた時、すでに、隠匿場所から彼は合鍵を取り出していた。彼は、いともかたんに持前の合鍵を使って開錠した。それから、寝ていた中年男を叩き起し、脅し上げてから、この男を楯（たて）にした。

留置所と事務所の棟を隔離するために扉があつた。さつき、見張りの警官が出て行った扉である。

この扉には合鍵は通用しなかつた。

糞度胸をきめ、彼は、扉の内側で待った。見張りの警官が戻って来て、扉の鍵を開ける時に飛び出すつもりだった。

頑丈な鉄の扉だった。

コンクリートを叩く足音がした。彼は中年男の口を片手で押さえた。もう一方の手は咽喉仏に喰い込ませた。鉄の扉は開錠され、警官は片手に熱い茶の入った湯呑茶碗を手に、留置所の内側に足を踏み込んだ。中年男を突き飛ばし、同時に、鉄の扉を手前にと大きく開ける。

中年男と正面衝突させられた見張りの警官は、不意を打たれ、横ざまに倒れた。

湯呑茶碗の砕ける音がした。

白岩由吉は、もう、留置所の構内を飛び出し、宿直室と事務所にと通ずるコンクリートの廊下を突つ走っていた。

真夜中のことで人影はない。職員用の便所に入り、ガラスを一枚叩き割って表に飛び出した。ピーピーと呼子笛が鳴った。

宿直室の警官も起き出していた。宿直室は窓を開けるとすぐ外に出ることができる。

「白岩が逃げた！」

と、見張り番の警官が叫んだので、宿直の警官は素足のまま外に飛び出した。

黒い影が、三十メートルほど先を、脱兎のごとく駆けていた。

「おい！待て！」

青森署の近くに荒川が流れている。白岩は追手を知って、この荒川まで走り、川の中に身を翻した。まだ四月に入ったばかりの日のことであつた。雪水だつた。

縮み上がるほど冷めたかつた。

対岸まで泳ぎ切り、土堤に這い上る。右に逃げるべきか左に逃げるべきか、一瞬迷つた。

左に曲がつた。

自分をかくまつてくれる男がこの場合必要だつた。青森操車場裏の長屋の一軒に住んでいる男のことを思い出し走つた。賭場で知り合つた男で古川と言つた。警察に、東京での金庫破りのための修行のことを教えた男である。この男には賭場での貸し金もあつた。

裏口の鍵を、古釘一本で開けて、この男の部

屋に入り込んだ。全身ずぶ濡れだった。

てつきり、古川は報復のために、白岩が押し入ったと思つた。が、白岩は情報うんぬんの話は知らないようだった。

翌日には、早速、刑事が古川の家にもやって来た。白岩は畳を剥がし、床下に潜んでいった。そして、このあと、五日間も、この男の家を潜伏した。白岩は古川のために、危ないところを助かった。

六日目、『なにか、二人で大きなことをしよう』と、話がまとまった。

留置場を逃げたぐらいでは大騒ぎにならないかつた。たかが、飛びつちよをしただけのことであつた。

筒井村浜玉川の佐貫幸助商店が押入り先と決まつた。

この前、土蔵に押入つた同じ場所を狙つた。雑貨商で質屋もやっており、小金を貯めていると踏んだ。

ケチな土蔵破りはやめて、今度は金庫を狙うつもりだった。

初老の夫婦者に、養子縁組で結ばれた若夫婦の家族構成だった。三年続きの稲の不作に娘を遊廓に売りに出す貧農の親の数が増えた。勢い質屋などは繁盛した。古川は賭場金欲しさに一緒に組むことに同意した。

白ぎやの短刀を一振り、古川が胸の内にした。見張り役は大男の古川の役割りだった。あいにくの月夜だった。

遠くの八甲田山の山頂にはまだ雪があつた。月の光に、白い山の形が映し出されてい

た。十和田湖に通じる道のかたわらに佐貫商店はあった。

リサヌキのタヌキ。村人は腹の黒い男を陰ではそのように呼んでいた。

事実、その吝嗇（りんしょく）の故に金を貯めていたのであった。

二階建てで、瓦屋根、それに白い土蔵、ねずみ返しのついた高い土塀、旧家のたたずまいであった。白岩由吉が先頭に立った。

鍵が掛かっている、鍵は掛かっていると同然だった。二人は苦もなく、佐貫商店の広い邸内に入り込んでいた。

2

階下で寝ていた老人夫婦を叩き起し、持ってきた荒縄で縛り上げ、手拭で猿轡（さるぐつわ）を噛ませた。手提金庫を開けたが、日銭なのか、十円札ばかりが四枚、バラ銭を入れても五十円はなかった。

「大金庫があるべ」

白岩は部屋の中にあると踏んだ。

大金庫があるならだれでも身近かにおきたがる。

「爺っこ、婆あに訊いてもむだだべ、隣りの部屋でねえべか」

白岩が古川に言った。二人は隣室に入り込んだ。壁にはめこむようなかたちで長方形の大きな金庫があった。

彼が東京で鍵の構造まで研究してきた甲斐があった。わけもなかった。

その成果か、複雑にひねった作りの針金を、操作している内に、共腹（ともばら）部分に同調し、簡単に鍵は開いた。ぎいーと、音がし、重い扉が開いた。

懐中電灯を照らす。

期待したほどのお宝の山ではなかった。百円札の束を見つけた。二、三千円はある。それでも、荒稼ぎのうちに入る金額だった。この時、階下の人の気配に気づいた娘婿の重雄が、日本刀のさやを払い、片手に捧げ持ち、そつと、階段を上がって来た。

見張り役のはずの古川が気づいて先に逃げた。白岩はやっと、百円札の束を一つ手にしたところだった。それでも、十枚合わせの束を、もう、一つ、合計二千円は懐にした。悪いことに、先に逃げた古川が、火鉢かなにかにぶち当り、大きな音を立てて倒れた。

その古川を、白岩は飛び越え、忍び込んだ勝手口に突進し、表に出た。

後ろを見たら、古川の姿がない。一瞬迷った。その場に四、五秒立っていた。

古川の大きな姿が転がるようにして飛び出した。すぐあとを日本刀片手の重雄が追って来た。余程あわてていたのか、もう一度、つまづき、古川は裏庭の砂利石の上に前のめりに倒れた。

「奴は斬り殺される！」

と咄嗟（とつき）のことに白岩は思った。

日本刀を構えた男の腰に白岩はしがみついた。古川は、その隙にはねおきていた。

白岩は怯んだ男の腰を後から足で蹴った。

男は日本刀をふりかざしていたので、立上った古川に斬りかかる恰好になった。古川と男の体がぶつかり合った。古川の手にしていた短刀が男の胸に刺さった。男の胸先に短刀は向いていたのだった。

ずぶりと刃先が入った。

「ぎゃーっ」

それは人間が死ぬ時の声に聞えた。

二人は難をのがれ逃げた。人の居ない荒川の河原に飛び降りた。返り血を浴びていたので、川水で顔と手足を洗う。

刺された重雄は隣家のものを起すために咄嗟の機転で「火事だ！火事だ！」と重傷を負っている身で叫んだ。

それで、すぐに、隣家のものが飛んで来て惨状を眼にし、佐貫商店の電話で警察に通報した。追われた時に、逃げる先を彼らは予め決めていた。

前科十四犯の泥棒仲間、市田巳之助の一軒家が荒川土堤を四百メートルほども離れた場所にあった。

農家の田んぼの隅にある農具置場で、人目につくことはない。

二人とは、市田は素知らぬ仲ではなかった。二人の身柄を引受けた。

もちろん、たっぷり礼金にも、この男はありつけた。金庫が狙われたこと、見事に錠があけられていること、白岩が逃走中の身であることから、青森署は白岩にすぐに眼を付けた。

養子の重雄は深傷がもとで二日後に青森陸軍病院で息を引き取った。

その時の証言で、一人の男が大柄であることがわかった。古川の大きな足跡から足がついた。荒川土堤は春先の雪解け道でぬかるんでいた。それで、市田巳之助の一軒家に大小の二人分の足跡があることを、警察はつき止めた。

暗がりのせいもあつたが、重雄はもう一人の白岩の背恰好のことなどよく記憶していなかった。

先ず、警察にあげられたのは市田巳之助だった。泥棒仲間の仁義で彼は二人の名を口にしなかった。

「おらなんもやってねはんで、吐げっても吐ぐものねえっ」

事実はそのとおりだったが、共犯者はあがらぬままに、佐貫商店への押入り強盗の事件の被疑者に市田巳之助はされてしまった。

逮捕される前に大金を手にしたことで久しぶりに気が大きくなり旭町の遊廓で派手に散財した。遊ばせてもらった恩義もあつたことだから、彼は二人を庇ったのだった。年齢も六十一歳、刑務所暮らしが長いから、したたかだったし、身は潔白だったからとうとう証拠は上らず、一月余の拘留で釈放された。

白岩は古川と二手に別れた。二人はそれっきりの仲となった。

古川は自宅に舞いもどり素知らぬ顔を極め込んでいたが、大男であつたことで引っぱられた。しかし、古川も直接犯人とは断定できず、

微罪で間もなく釈放された。事件は迷宮入りかと思われた。

一方、白岩は青森県内では危ないと思い、岩手に逃げた。奪った金ではじめのうちには派手に遊廓で遊んだがすぐに金は失くなった。金庫破りを考えたが、一人では無理だった。結局、相変らずの土蔵破りで、わずかなものを得て暮らしていた。

二年後のある日、盛岡市内の質屋の蔵に入り、特別警戒中の警官に白岩由吉は逮捕された。同じ蔵に二回入った。

例によって鍵を開け、また元通り施錠しておくやり方である。家人が張っていて、駐在所に待機していた特別警戒の警官の手にかかった。三度目の侵入を果し、出てきたところを櫂の棒で一撃された。

身柄は盛岡署に移されたが、脱獄囚であること、それに、佐貫商店に強盗に入った被疑者の線はまだ消えていなかったことから、青森県警と岩手県警の間で話がつき、青森刑務所柳町支所に白岩の身柄は移された。

今度は土蔵破りの罪とはちがう。新聞で、佐貫重雄が死んだことを白岩は知っていた。

逮捕された時のことを考えて、彼は、はじめは男の隠し場所にいつも破錠用の針金を忍ばせていたほどだった。

だが、二年もたつと、つい油断をした。

逮捕された時、白岩は逃走具を身につけていなかった。

青森署の高畑刑事が、白岩に特別の関心を

持った。留置所から逃げられた苦い思いもあったが、絶対に佐貫商店への押入り強盗は大金庫を狙った点から、この男の犯行にちがいないと踏んだ。

高畑刑事は、佐貫商店の事件現場にも立会い、逃 走経路なども追った。

全速力で走ったとみえて足跡は歩幅があり、地下足袋の指先には力が込められていた。

市田巳之助の一軒家の近くで消えた―それで、これまで市来巳之助の交友関係、それに荒川沿いの金浜、大別内、向野沢、小牧野、横内、合子沢などの各部落の前科者などを洗い、ある者は別件逮捕で 取調べた。だが結局、確たる証拠が極めず、事件は迷宮入りの様相を呈していた。

縄張り争いのうるさい警察間では異例のことだったが、高畑刑事はもう一度、佐貫商店事件の被疑者として横浜刑務所に収監されていた市田巳之助を、柳町支所の未決監に呼びもどした。白岩由吉と同じ屋根の下に二人は勾留されることになったのである。

この頃の捜査の方針はほとんどが、手口による犯人の割出しであった。科学捜査の現代ならわけなく、白岩由吉の犯行と断定できたが、当時はまだ刑事の 勘に頼るしかなかった。

だが、呆気なく、白岩由吉は、佐貫商店押入り事件の犯人であることを自分から吐いた。たまたま取調中に、横浜刑務所から移された市田と廊下ですれ違い、眼が合った。

市田が半年前に被疑者として引っ張られたことは知っていた。犯罪者同士の信義を六十

を越した男は守ってくれた。

取調べはこれから苛烈を極める。吐かせるために市田がこれから痛めつけられるのはわかっていた。庇ってくれた男にこれ以上の迷惑は掛けられないと彼は考えた。

それで、あっさり、古川と二人で組んだ犯行であることを吐いた。咄嗟のことだったとは言え、佐貫家の三十五歳になる養子の男を殺していた。目覚めがいいわけもなかった。

強盗殺人罪で起訴された。

白岩由吉は三十歳になっていた。

青森刑務所柳町支所は二階建てのコンクリート造りで、周辺には青森地方裁判所や法務省の合同庁舎などがあった。

柳町の国道口―タリーの近くである

近くには明治の建築そのままの県庁や、日本赤十字社などの瀟洒（しょうしゃ）な建物が見られた。

白岩由吉は自白したものの、刑事に「死刑はまちげえねえがらな」と言われて、毎晩いやな夢を見た。今度ばかりは大きな罪を犯した。

それに主犯は自分だった。殺された重雄が死ぬ間際に「こした馬鹿臭えことねえ、仇ば討つてけろ」とことばを残して死んだと聞いて余計に気持が滅入った。

が、覚悟は決めねばと思った。

自分が吐いたことで逮捕された古川にも借りを作ってしまった。それで自分一人で罪を負う気になった。青森地方裁判所の法廷で、何回かの審理が行なわれた。

国選弁護人が、準強盗罪を主張し、殺人行為

が突発的に起きた事実を指摘したことで、第一回の求刑判決で白岩は無期懲役、古川は十二年の求刑を言い渡された。

3

刑務所仲間のことばで、錠前破りのこは、つめ落し^ゝという。昭和十七年四月に白岩由吉は、秋田刑務所の鎮静房の天窗を破つて逃げた。^ゝてんぬけ^ゝである。

留置所などから逃げたのは施設や警戒体制の不備などもあり、いわゆる単純逃走の部類に入る。刑務官はトバすなどともいう。

これまでに四回の逃走歴があつたが、飛びつちよした程度のことだつた。

第一回目の特殊逃走はこの青森刑務所から始まつたのであつた。

第二回目が前章に登場した秋田刑務所の鎮静房の破獄である。

前回の留置所からの脱走もあつたので、青森刑務所での警戒は厳重であつた。未囚だから本来は柳町支所の拘置監に送られるところを彼は特別措置で青森刑務所に身柄を送られた。

だが、彼は、絶対に逃走のチャンスはあると確信していた。運動時間のために外に出される三十分間、それに、木桶の便器を朝、外の溜桶に捨てに行く十分間ほどの時間が狙い目であつた。実はこの時、看守の間では、白岩由吉について妙な噂話が出来上つていた。

四回の飛びつちよの中には、看守が居眠りしていて留置所から逃げられた例もあり、また逃

げ足の早さと、身のこなしから、あの男は催眠術を使い、忍術の心得もある」と過大な噂が伝わるようになっていた。

催眠術をかけるという話を知っていたのか、ここの看守はみんな、白岩由吉に睨み据えらると眼を逸らせた。

六月のある日、彼はちよつとした幸運に恵まれた。前日、ペンキ塗りがあり、独居房の外の板壁が薄ねずみ色に塗られた。

ついでに、古い釘が打ち変えられた。

朝、便器を持って一列に並び、溜桶に汚物を捨てに行く時、殺人の罪で収監されていた男が彼に幸運をもたらしてくれた。空になった便器の桶の中に錆びた釘を一本投げ入れた。

「おらごとも連れていってけろっ」

と、一言だけ喋った。隣房の男だった。

どこで釘を手に入れたかは知らない。

たぶん、前日の工事の時に金網の張られた狭い三角地帯の場所に古釘は落ちたのかも知れない。扇状の運動場の区切りの金網越しで隣り合ったが、これまで彼とは口をきいたことはなかった。どこの収監所でも意地の悪い看守は必ずいる。ここの青森刑務所にも権付くばった男がいた。

「おい、起きろじゃ。なんとまだ生きでるんだはで始末が悪い。死んだものいねえべがど、毎朝楽しみにしてるのになっ」

この男が朝番の時には決まって同じことを言う。

「飯食（ママけ）るのごと、誰れのお陰と考える。なんと、乞食（ほいど）と同じだべ、恵

んでけろつてしゃべってがら食え」白岩由吉は相手にしなかったが、他の未決囚たちの何人かは「恵んでけろ」

と、物乞いの真似をした。

彼はこの男に、前々から恥をかかせてやろうと機会を窺っていた。

古釘を手にした時、先ず考えたことは、この男が当直の夜を狙ってやるということだった。態度の大きいわりに、勤務にはルーズなところがあり、よく見張所で居眠りしている。

夜間は中央見張所は一名になる。ただし見張所のすぐ近くには二名の看守が仮眠をとる宿直室があった。

ほんとうに、白岩由吉には、催眠術の心得があつたのかも知れない。夜半、あの態度の悪い看守は居眠りを始めた。いつも観察してきたからこの男の居眠りの程度はすぐわかる。小さな寝息を立てていた。

絶好の機会だった。

大体が肝いびきをかく男だったが、大きないびきをかいた時は自分の寝息に驚ろいて眼をさますことがあつた。

小さな寝息の時はしばらく居眠りが続く。

彼は古釘をくの字形に曲げてから、鉄格子の間から手を伸ばし、外側にある鍵穴を、釘の先で探った。もの慣れたものだった。

かんたんに錠前をはねた。見張所は、いちばん奥の扉の前にある。看守は机の前で舟を漕いでいた。夜間巡察は三十分ごと、その隙をついた。隣房の男を先ず外に出す。同じ錠の造りだからすぐ開いた。

「宿直室に二名いるべ。気付がれではなんねえ。あの野郎を縛り上げるでおめは口をふさぐだあ」

見張所の居眠り看守を顎で示す。

二人は四つん這いになり、見張所に近付く。見張所の木机のそばに身を寄せる。相手からは死角になる。机の下から覗いたら、まだ軽い寝息を立てていた。机の上に不用意にも手錠が一つ投げ出してある。捕縄（ほじょう）もあつた。

二人は目配せし、素早く行動を起す。

隣房にいた男が後から大きな手で看守の口を塞いだ。同時に白岩が、看守の手首に手錠をはめた。看守は椅子に坐つたままだった。咽喉元に彼は右手を当てた。

「声出すでねど！」

看守は眼ばかりを大きく見開いている。捕縄で、椅子に坐つた姿勢のまま、その椅子と共に縛り上げた。彼は上衣を脱ぎ、その袖口で看守に猿轡を嚙ませた。

ゆっくりと、椅子ごと横に倒す。体ごと倒れたら大きな音がするからだつた。鍵束を奪う。見張所から十二、三メートルの場所に舍房棟入口の鉄扉があつた。合鍵で開ける。長い廊下があり、両側はふうの窓になつていた。そつと、窓を開ける。その窓から二人は外に飛び出した。

「裏門がら逃げるべ」

高い塀がまわりには張り巡らされている。

問題は、裏門に見張番がいるかどうかだつた。物資などを搬入するので、昼間はここに

は看守がいた。が、裏門に着く前に、小さな通用門が見つかった。

もつとも鉄の扉で、作りは頑丈だった。ふだんは使われていないらしい。

がっちりと門（かんぬき）式の横棒がはめ込まれていて、南京錠の大きなのがぶら下っていた。

南京錠を開けるための合鍵は鍵束の中にはなかつたが、鍵束用の針金を使って、十五秒ほどで開けた。音をさせないように錆びついた門式の鉄棒を引く。塀の外に出ていた。

全速力で走った。

午前三時、どこを走っても真暗闇だった。

「おらは八尾仙造と言います。どうあつても、もう一人殺（や）らねばならねえ奴がいるだ。二人殺した。どうせおらは死刑の身だべさ。賭場の出入りでおらの叔父貴が殺られた仇だ。かんじんの野郎ごとまだ叩つ斬っちゃいねえんだ。このご恩だば、一生忘れねえ」

狭客（ききょうきやく）のような口をきく男だった。

山の方角には向わず、街中へと吹っ飛んで行った。彼の足は八甲田山の方角に向っていた。安田の部落を抜け、細越の裏山の闇に紛れ込んだ。あわてることはない、と草叢の上でしばらく寝た。二時間ほど眠った。

ここは青森の街が望める小高い丘の上だった。八甲田山の連峰を背にしていた。山の稜線がやがて輝きはじめて、あたりの白い闇が自然の色を浮かび上らせてきた。

初夏というにはまだ早かったが、樹々の緑

は華やいでいた。朝風の爽やかさにも心を洗われた。この時、白岩由吉は、別れたきり十年以上も会っていない姉の真佐江のことを思い出していた。

4

白岩由吉は、三歳の時に、父を亡くした。

津軽半島の北端外ヶ浜に面した小さな漁村で生れた。竜飛崎（たつびざき）の岩礁が、山の上に立つと望める。津軽海峡の向うには北海道の松前半島もみることができた。

三厩（みんまや）村に父親の栄三は流れ着いて、漁夫の手伝いのようなことをやっていたので、病死した時、家にはなんの蓄えもなかった。

六歳の姉の真佐江と二人、由吉は、八甲田山に近い温泉地の村の豆腐屋の家にもらわれて行った。

母親のきくはまだ二十六歳の若さだった。生活苦のために乳呑子だけを連れて秋田の農家にすすめる人があって、落ち着く先を見つけた。二人がもらわれて行った先は父親の筋だった。母と別れたきり縁がなくなつた。豆腐屋の稼業は、かなり辛い作業をとまなう。朝は寒い冬でも三時起き、水を扱うから、輝（あかぎれ）ができて一年中、傷が治るところはなかった。三歳の由吉はさすがに用を言いつけられることはなかったが、その代り、食べるものの量を極端に少なくされた。

六歳の姉は年端も行かぬのに、小用を言い

つけられて働らかされた。

「まったぐ、むだ飯（ママ）、食うばかりでねえの」

この家の女房は意地が悪かった。何度か、姉の泣顔を見たが、弟の顔を見ると泣くのを止めた。

由吉も小学校に行く前から手伝った。

石臼（いしうす）で、水に漬けふやかした大豆を挽き潰す。大豆の入った重い袋を担いだ。燃料の薪割りもやらされる。

大きな木桶に満々と水が張られる。移動する時は二人掛かりであった。

が、小学校の高学年になった頃には由吉は一人で、重い水の入った木桶を持上げるほどになっていった。毎日のことだから、腕が太くなり、腿に固い肉がついた。

この頃すでに馬鹿力が備わっていたのだ。

二人とも、豆腐屋の叔父の家では結構役に立った。時には小遣いがもらえることもあったが、父母の愛は受けることなく真佐江も由吉も育った。

どの仕事一つにしても幼ない子供の手に負えるものではなかったが、働らかねば飯は喰わせてもらえなかった。

由吉が小学校を卒業した十二歳の六月、少年はこの後の彼の生涯に影響を持つことになる貴重な体験をすることになる。

月に一度だけ店には定休日があった。休日でも叔母は姉弟に用事をいいつけた。

「今日は天気もいいし、二人して山菜とって、来いへ」

この日ばかりは叔母は笑顔になる。大きな握り飯を二つに、一個一銭の飴玉を二つずつ持たせてくれた。山菜採りに去年の春行かせたら背負い籠に一杯背負って帰った。

温泉街なので季節のものは喜ばれる。

八百屋が高い値で引き取ってくれた。豆腐屋の一日の売上げ分より多かった。

それで六月の芽吹き季節、叔母は二人を八甲田山の麓にと追いやったのであった。

だれにも遠慮することなく二人だけで自然の山野に身をおくことができた。特に昼めし時が由吉には待遠しかった。姉と争ってわらびやぜんまいを摘み、すぐに籠の中を山菜で一杯にした。食べ盛りの齡だから早く昼食にありつきたかったのだ。

幼いとき別れたきりの母のことを、真佐江はこんなとき、由吉によく話してくれた。

青森のねぶたは八月のはじめ、一週間ほども続けて繰り広げられる。

ねぶた囃子が威勢のいい笛や太鼓の音を響かせると津軽路には夏が訪れた。

日頃の静かな街が、急に活気を取り戻す。まつりの夜は赤い金魚の絵柄の浴衣を着せられ、津軽線に乗って真佐江たちは青森の街に行った。由吉にはあまり覚えがなかったが、真佐江は長じていた分だけ、まつりの様子をよく記憶していた。

ラッセー、ラッセ、ラッセーラ、ねぶた囃子の掛声を聞くと母を思い出すと真佐江はよく言った。

青森ねぶたは戦さに勝ったあとの凱旋（が

いせん）のおまつりなので凱旋まつりとして知られている。

それだけ勇壮で、ねぶたの姿絵も色鮮やかで勢いのある図柄が多い。

だが、幼ない姉弟は、ねぶたまつりの夜に青森の街に出、豆腐屋の叔父夫婦に引き取られた。二人の心の中には祭は悲しいものというもの思いもあったのである。

「すぐ迎えにくるはんで、わんだつかだはんで」

少しの間母のきくは幼ないわが子を欺した。この時、秋田から、夫になる男が来ていた。綿菓子を買ってもらい、赤いほおずきを真佐江が叔母にねだっている時に、母と乳呑子の弟、そして連れの男は人込みに消えた。

「もじき、はあ、ねぶたまつりだのう。おらはまだせつなくなる。かつちはおらだちごと欺したんだきや」

「姉ちやがいるはんでいいじゃ」由吉はあどけない少年の眼を向けた。「うめごと、しゃべって……」

十五歳になつていた真佐江は、由吉にはもう母親のように見えた。豆腐屋ではもう三度の食事を姉はちゃんと作つた。叔母が腰を痛めて臥せっていた時などは、由吉には、真佐江が自分の母親のように思えた。

場所を移動してまた山菜採りを始める。わらび、ぜんまいの他に笹筍、山蕨、こごみなどもあり、すぐに背負い籠は一杯になった。

前々から、由吉は眼の前に聳（そびえ）え

立つ八甲田山の頂上まで登ってみたいと思つていた。

三歳の時から朝夕眼にしてきた八甲田山は、春夏秋冬、いろんな山容を彼に見せてくれた。こんもりと盛り上り、なだらかに山裾野を広げた八甲田の連山は、いまは穏やかな緑に輝やいている。

冬の八甲田山は、魔の山として恐れられる。かつて青森連隊が雪中行軍で、悪天候のなか多数の兵士の犠牲者を出したことで名を知られていたせいもある。

ちよつとした冒険心もあった。

「おらは男だべ、あした山だの、ひとつ走りげえね」と考えた。

実際、小学校の遠足の時なども、まるで足の疲れを知らなかった。

豆腐屋稼業の力仕事で足腰が鍛えられていたのであった。今から頂上まで行くと云つたら真佐江は反対した。

やっぱり、八甲田山は魔の山の思いがあつたのであった。だが言い出したらきかないところが由吉にはある。仕事の段取りでも叔父からとやかく言われると楯付いた。自分に間違いがない限り、とことん自分の説をおす、強情者（じよつぱり）なのだつた。

背負い籠は帰りに背負って帰ると言い、姉だけを先に帰した。

残っていた飴玉を姉は由吉にくれた。

「甘いもんは疲れがとれるべ」

母親のような心遣いを姉はみせた。木の葉っぱに、水晶玉の飴を由吉は大事に包み、半ズポ

ンのポケットに入れた。

由吉は後も見ずに、放たれた鳥のように、もう駆けていた。

津軽平野に裾野をのばす八甲田山は奥羽山脈に噴き出した火山群で南八甲田と北八甲田に別れる。

一五〇〇メートルから二一〇〇メートル級の山々が並び八甲田八峰と呼ばれていた。この日登ったのは千二百メートル余の石倉岳であった。

由吉は、急坂の山道を巡った。

ぶな、あおもりとどまつ、はいまつの樹林が少し暗い日陰の地を作っている。

郭公（かっこう）の鳴く声がし、アオゲラの木をつつくせわしない嘴（くちばし）の音も返ってきた。

平地に出ると小走りに駆けた。光が溢れていた。青草の波が、沢風になびく。涼しい風が光の波を洗ったが、由吉はもう汗びっしりだった。姉にもらった飴玉を大事そうに口に入れ、頼張る。まだ太陽は真上にあるように見えた。たった一人で、この山を所有しているそんな気になった。頂上に辿り着けば、お山の大将になれるのであった。

大人の脚で二時間はたっぷりかかると言われる険しい山道を、由吉は一時間半ほどで登り詰めた。生れてはじめて、自分の生れ、育った村や町の眺めを山上から見下ろした。

小さな体だったが、とたんに自分が偉い人間になったような気分になった。

下北半島が海を距てて東方に、くつきりと

描きとられていた。斧（おの）型の地型といわれるように北海道側に突き出している半島の部分が斧の刃の形状を見せていた。眼下近くの街のつくりは、青森市の眺めであった。ちまちましました箱庭の先に、陸奥湾の海がきらりと輝やいて見えた。

生地、津軽半島三厩村のあたりも望めたが、少し春霞にかすんで見える。それだけ、この地からは遠くにあつた。

津軽平野に眼を転ずれば、遙かな彼方に津軽富士と言われる岩木山の山容があつた。

体を一回転させる。太平洋側の海は水平線のどこまでも続く広い海を見ているようなものだった。

眺望が一気に開けている。

父や母の顔は思い浮かばなかった。

やっぱり姉の真佐江に、一人で頂上を登り詰めた感激を語りたくなつた。

自慢する相手は一人の姉しかなかった。

今度来る時は、この山の頂きに姉も連れて来ようとき、由吉は思つた。

由吉が、下りの道にかかつてすぐのこと、彼は人の気配に足を止めた。山頂を巡つた一本道に人の姿らしいものを見かけた。はじめはぎよつとした。まるで一匹の獣のようにも見えなかった。が、由吉の姿に気付いていたのか、小柄な男は面を上げ、片手を捧げてあいさつを送つてよこした

。見かけぬ風体をしていた。

話に聞いたことのあるマタギなのかも知れなかった。山で狩りをして暮らしている人のことである。頭に菅笠（すげがさ）をかぶり、上半身には蓑（みの）をつけていた。胸から腹にかけては鹿の毛皮の胴衣をつけている。

腰には藁（わら）製の部厚い腰蓑、脛にはやはり毛皮の脚絆（きやはん）が巻きつけられていた。

毛皮のついた沓（くつ）のようなものは足裏にすっかり馴染んでいた。

手にはニメートルほどの手製の槍のようなものが握られている。腰にも一挺の鉈（なた）がぶら下げられていた。

菅笠の下の顔立ちはどこか自分に似ていた。顎の張った顔、がっしりとした体躯、それに背が低く体の重心が下半身にある感じも似ている。ただ陽灼けした顔と、眼光の鋭さは自分にはないものだった。

「お前、どこのもんだばあ」

それは津軽弁だったので、由吉は急に親近感が湧いた。声の調子もやさしかった

「まんだあ、童（わらし）なのに、よぐ登ってきたな。わいはどってんびっくりしたじゃ」

二人は傍らの岩の上に坐った。男は自分の名を源蔵と名乗り、弘前在のマタギで齡は五十六と言った。

十六歳の時から岩木山から八甲連峰にかけてを自分の猟場にしてきたという。

「なんぼでつけえ、尻（どんず）だば。一年もすると、立派なマタギになれる体だな。俺が面倒ば見たぐなつたじゃ」

源蔵は、由吉の腕を掘み、腿の肉を指でつまんだ。身体検査されているようなものだった。

「父っちはいるだな」

「いねエ」

「母っちはは」

「いねエ。酸（す）ヶ湯温泉の豆腐屋にまだちつちえ、わらしのときにもらわれてきた」

「ここぞでな、俺（わ）が一緒に来いというたら人さらいだべ。酸ヶ湯温泉なら錦館というのがあるべな。マタギになりてば錦館の主人さしやべれば、俺ど、連絡取れるべ」

それから、由吉の気を引くためか、蔵は山で暮らすための色んな智恵を授けてくれた。

「おめ、山ごと好きだえんだが、山さ入ってもし道さ迷ったら樹林の中さ入っていちばん陽の当る場所さある樹ごと探して、その根元ごと見る。山歩いてで、いちばんおつかねのは山おやじ熊さ遇うごとだ。ぱったど会ったばおたがい、どつてんびっくりして危ねえ。そした時

あ、なるだけ、太目の樹さ登れ。山さ入る時あ、鉈もよーぐ研いで入るだ。熊の奴さ、追いかけて来で、樹に登ってきたらばあわてずかかれえ。熊の手の爪を錠で叩つ切る。熊のいちばんの武器は、でつけえ掌と鋭い爪だあ。そしたもんで大低の熊は逃げ出すのが、手負いの熊だば、復讐心ば強いだに用心すべし。木っ葉千切って風の流れば知ってから、匂い嗅がれねよ

うに風下に向って逃げるだ」

はじめて聞く話ばかりなので、その時、一人の少年は眼を丸くして源蔵の話を聞いた。

他にも山の暮らしの智恵を授けられた。

食糧が欠乏した時でも、草だけでも、一週間は生きられること。その時は生のままだと下痢することがあるので、石で叩き潰し、三時間ぐらい太陽光にさらして食すること。

鳥や小動物を獲る時の小さな仕掛けのことなども教えられた。

後に、この時の、源蔵との奇遇のお陰で、山中をさまよった時にも飢えて死なずにすんだ。山の暮らしの智恵が役立つたのだった。

その後、錦館の主人がらもマタギになる話が持ち込まれたが、叔父夫婦は一笑に付した。この時、由吉が、山の生活に憧れて、源蔵の後継ぎになっていたら、のちに脱獄魔として白岩由吉も騒がれずにすんだのかも知れなかった。たった一度の出遇いだった。

少年と源蔵は六月のある日、父と子のような触れ合いのひとつきを持ったのであった。

昭和十一年の六月七日。

白岩由吉は八甲田山とはまだほど遠い、細越の裏山に一人でいた。ちらと、八甲田の連峰の一つに、分け入ることを考えた。

この山の中に入ればば：たとえ、山狩りをされたところで捕まるはずはなかった、彼が寝転んでいる山の斜面には、やわらかな緑の山菜類が芽を出していた。

わらびにぜんまい、山蓆ばかり生えている場所も視野の内に入った。

彼は少年の頃のことを、ふと思い出していた。とうとう姉の真佐江とは山の頂に登ることはなかった。

十八歳で蟹工船に乗るために北海道に渡った時、姉は秋田の百姓家に嫁いで行ったが、それっ切り、彼が悪の道に入ったことで音信は絶えていた。

細越の裏山からはまだ八甲田の連峰は遠かったが健脚である彼の足をもつてすればさして難儀な道程でもない。

捜査本部は八甲田山中に逃げられることをいちばん怖れた。登山ルートはそれらしきものはあったが、一步横に逸れば、樹海ばかり、特にこれからの季節は山も生氣盛んなときだから、潜伏するには絶好の場所となる。

捜査体制は青森県警察始まって以来の大規模のものとなった。新城、鶴ヶ坂、大釈迦、浪岡の市街地、それに高田、細越、滝内、大矢沢などの山村部の各地に人員を配置した。

刑務所側が直ちに青森県警に捜索を依頼したので、消防団、青年団、一般市民の有志など人海包囲作戦の体制が逸早く青森市内、周辺に敷かれた。

山狩りも成可く早い時期に開始することになった。八甲田山の樹海に紛れ込まれたらまったくのお手揚げになるからである。

同時に新聞社にも手配書と協力方の文書が手渡された。

一、各新聞社は犯人の写真、犯罪の手口、脱走当時の服装、人相等を掲載すること。

犯人らしき者の来往を見聞したときは、速やか

に警察署に報告すること。

一、山に入ると兩名とも強盗や窃盗、殺人をやるおそれがあり戸締まりを厳重にすること。

一、昨夜来の盗難は、細文洩らさず報告すること。

一、警察官は犯人逮捕に全力を続けているから、青森市近郊の町村は消防団、在郷軍人会、青年団等において自警団を組織して非常警戒に当ること。青森県警はじまって以来の大捕物というのは、ほんとうで、駅頭や、交通路の要所、テント張りの自警団の詰所など、捜索班の人々がどこへ行っても見られた。

第一号の情報が寄せられたのはその日の午後二時すぎのことであった。

青森市栄町の阿弥陀寺附近で、由吉らしい者を発見したという通報が寄せられた。

捕り物劇は鳴物入りで、消防車がサイレンをならし街中を走り抜けたので、数百人の市民が野次馬根性丸出しにそのあとを追った。

警官たちはサーベルを抜き、眼の前に脱獄犯がいるようなおっとり刀の姿で現場に駆けつけた。市内各所の火見櫓（ひのみやぐら）の半鐘が乱打されたりしたので、否が応でも緊張感が盛り上った。

結局、この第一報は私服の捜査員の怪しい振舞いを見誤ったもので空振りに終わった。とうとう第一日目は、あちらこちらから寄せられる情報に振り回されただけで徒労の内に終わった。

脱獄二日目の朝、青森県警内の捜査本部では山狩りのための特別捜索会議が開かれた。どの場所を特定するか、これがいちばんの難題であ

った。あたりを山に囲まれた八甲田山連峰の裾野の村々はあまりにも広い領域であった。

白岩由吉と、八尾仙造、この二名は一緒に逃走しているのか、別々の行動をとっているのか。その判断一つによっても搜索領域は広がる。

だが、脱獄二日目の午前十時、捜査本部に新たな殺人事件の情報がもたらされた。

どこに潜んでいたものか、八尾仙造が、浪打町の小料理屋の二階で開帳されていた賭場に手錠を片手に飛び込み、松前組の男の脳天を叩き割った。

組同志の遺恨のもつれ、それに、八尾仙造の情婦もひどい目に遇ったことから、八尾は二人の男を日本刀で斬り殺したのだった。逮捕され、彼はすでに青森刑務所に収監されていた。情婦をおもちゃにした松前組の組頭に直接危害を加えることができなかつたので獄中で切齒扼腕（せつしやくわん）しているところを、白岩由吉と隣り合つた。

到底、自力では脱出できないので、白岩由吉と行動を共にしたのであった。

思いを果したのか、八尾仙造は、一旦、姿をくらましたが浪打署に自首して出た。脱獄囚は、白岩由吉一人に絞られた。

小さな情報がいくつか寄せられていた。

農具が失くなつたとか、食糧庫が荒らされたとか、山中で焚火の跡を見つけたというものであつた。この騒ぎでは無責任な情報がいっぱい寄せられた。

情報が多すぎて、山狩りするにも、どこか

ら手を付けたらいいかわからず、結局午後になっても捜査本部は結論を出せずにいたのであった。

7

白岩由吉は青森平野の外れの山岳地帯を迂回路（うかいろ）をとりながら西の方角に向った。特に、八甲田山周辺は彼自身に地の利があることから警戒は厳重だと思われた。行先は黒岩温泉郷のあたりに定めた。

秋頃まで山の中で潜伏して、ほとぼりのさめた頃、他郷に足を伸ばすことを考えた。

山形か、福島あたりが狙いであった。

用心していたので、百姓家には近付かなかった。一日目の夜に、すでに細越のあたりに山狩り部隊が入った。

その時、彼は山岳地帯を自慢の健脚で西へと向っていた。それで遠くに見える山狩りの松明（たいまつ）の明りを視認した。早々の山狩りは、八甲田山の山麓の小さな村のあたりと思われた。なにしろ空腹だった。

わらび、笹筍などを食べ、飢えをしのいだ。ひどい下痢症状のために、彼はだいぶ体力を消耗した。二日目には足元がちよつと覚束（おぼつか）なくなった。脚力が鈍った。

それに、初めての地の山中を歩いたことで、大きく迂回してしまい、結果的には、逃走経路はじぐざぐとなり、無駄足を踏んだ。

逃走方法、逃走先など、事前の心構えができていなかったせいだった。

山裾野の林の中を歩いてきたのに、里地に足が向いていた。人家には近付かなかったが、製材所の小屋に忍び入り、近くの山に入ったらしい積出し人夫の弁当に手をつけた。貧り食った。

腹を空かした野犬か、なにかが、人間の食物に手を出したように地べたに、竹皮の握りめしを、食い散らかした状態にした。包んであつた風呂敷包みなども、鋭い牙と爪で引き裂いたような跡をつけた。

わざとらしく、なんの獣とも知れない足跡をつけた。三つの爪趾（つめあと）を土の上にも、何カ所か印す。一息ついたが、下痢が治つたわけではない。

あの源蔵というマタギの男が教えてくれたとおり、天日にさらしてから口にすればよかったのだが、つい忘れていた。

逃げるのにそんな余裕もない。
彼は農夫に化けることを考えた。

野良着を、畑地の小屋に入り、身につける。蓑と菅笠も手に入れた。わらじ履きに脚絆、いっばしの農夫姿になった。

脱獄三日目、彼は、山地を巡ることを止めた。体力も落ちていたし、皆目（かいもく）、逃げている方角がわからなかった。

度胸を決め、里地に降りた。丁度田植え時だったので、他村から来た田植人夫の一人になりすます。水田の傍らを歩くと、みんな仕事の手を休めて、見かけぬものに視線を送る。他意はなかったが、これも他所者（よそもの）に対する土地者の興味のあらわれし方の一

つであつた。

「お早ごす。岩渡（いわわたり）に出るにはこの道でまちげえねえですか」

「この道、まっすぐだあ。あんだ、五月の手伝いだがあ」

五月というのは、このあたりでは田植えのことを言う。

「んだ。手伝いにいぐどこだアんだ」

「岩渡の沢藤太左衛門はおらんどこの本家筋に当るごさくのせえ。おらの名は沢藤吾作、よろしゅう言つてけれえ」

どうやら彼が脱獄囚だということは知らないようだった。

菅笠で顔を隠すようにしていたが、彼はこの農夫の男とのやりとりで少し安心した。滝内村孫内の岩渡部落に着く。夜通し歩いたので、午後の陽射しを浴びていると睡魔が彼を襲った。

山の中腹に、村の共同墓地が見えた。はじめに考えたのはお供物でもないだろうかということだった。

草叢を分けて山の小道を上った。共同墓地を見渡すと、新しい花が供えられている墓所があつた。

固くなつた草餅が三個そなえてあつた。土足で上り込むような慌しさで、草餅のある場所にすすみ、その一つを口にした。

よもぎの味がした。

まだ新しい木の墓標だった。土葬だから新仏は土中で静かな眠りについてるのだろう。土の上に坐り込み、彼は仏様のもの

を失敬した。

一膳めしの碗に、故人が好きだったのか、大豆と昆布を一緒に煮た菜もおかれていた。津軽名物のワツパに入った水アメも供えられていた。めしと菜は腐っていた。

あとから供えられたらしい草餅と、水アメだけを口にした。陽気に誘われ、そのまま墓石の一つにもたれてうたた寝した。

死者に対しては、むしろ彼は馴れ合いのようなものがあつた。蟹工船に乗っていた時も、タコ部屋で土方人夫をしていた時も、虫けらのように死んで行く多くの人を見た。いちいち死者に対して特別の感情をもっていたら、とても生きては行けない。

この世の生き地獄を見てきたから、墓所であることなど気にもならなかった。

それに、父と母に対する思いもそれほど、痛切なものではなかったから、先祖を敬う気持なども彼は持ち合わせてはいなかった。人がいないので、かえって、墓所は安心できた。

のんびり昼寝を極め込んでいた彼だったが、その頃、捜査本部は慌しい動きを見せていた。

六月十九日の午後三時すぎのことであつた。青森警察署の捜査本部に、岩渡部落の農夫が二人駆け込んできた。

「あの、逃げた男が、その、白岩由吉によぐ似た男がおらほの村さ」

「なに！白岩、まちがいないな」

「へえ、新聞の配書に出ていた男にまちがえ

ねえです。おらほの村の共同墓地（やんとら）で寝ておりますだ」

「まだ、寝ておるのか？」製材所のトラックに乗って、二人の男は、二時間もかけやってきた。捜査主任は問の抜けた質問をした。

「よし、鶴ヶ坂に連絡して、岩渡の周辺の道路を先ず塞げ。それから奴に気付かれんように村のものには騒いではならん」

間もなく電話連絡で、今朝方、二股部落から岩渡部落に歩いて行った出稼ぎの農夫風の男が、新聞の手配書の男に似ているという通報が来た。二股部落の沢藤という男からであった。

不便な地なので新聞は遅れて配られる。二日遅れの新聞を、家に帰って開いてみたら、白岩由吉の手配写真が出ていたのである。

すぐに、山狩りのための搜索会議が開かれた。時刻が悪かった。今から山狩り部隊を編成して岩渡に行くとい日没時になる。闇に紛れ込まれては手の打ちようがなかった。

それで、各道路の点となる場所に、私服刑事を重点配置一線でつなぐと楕円型の包囲網ができあがった。

捜査会議は午前二時まで続けられ、次の様な体制が組まれた。一、滝内村の岩渡、二股、大谷、孫内（まごない）の四部落を中心目標とする。

一、捜査人員は警察百九十名、（警察部と青森、青森水上、五所ヶ原、木造、板柳の各署員、及び巡査教習所受講生、消防組員五十名、計二百四十名を十四小隊に編成する。

一、各小隊は新城、鶴ヶ坂、浪岡、羽黒平

、王余魚沢、小館、高田、細越、三内を基点に中心目標に向けて搜索する。

一、配置完了は二十日午前三時、搜索開始は午前四時とする。

総員は活動を開始し、それぞれの配置についた。まだ薄暗かったが、そのうちに、白々と夜が明け来て来た。

鶴ヶ坂から孫内へ向った五所川原小隊が孫内部落に近付く。空は藍色になり、やがて東の空の端から白み始めた。青森警察署に注進した二人の男を同道し、五所ヶ川原小隊は共同墓地を目指す。

遙かな西方の八甲田連峰が、朝陽をはね返し、輝やいた頂を列ねて見せている。あたりはもう、すっかり明るくなっていた。

午前五時半を過ぎている。

五所ヶ川原小隊は、墓石に背をもたせ、蓑を体にかぶって眠っている一人の小男を発見した。この小隊は、中心部隊で五十数名いた。じりじりと共同墓地周辺から這い上り、完全包囲した。

不審者訊問のために、小隊長が、男の肩を叩いた。すでに、白岩由吉は人の気配に気付いていた。ここでこそと草叢で音がし、小鳥の声も聞えぬほど、あたりは静かだった。

白岩由吉は薄目を開けてまわりを見ていた。裏の雑木林に一気に飛び込む気だった。が、頭をおいている場所とは逆の方角になる。足音がしたと思ったら、指揮棒を手にした警官が立っていた。顔を上げ、周囲を見たら、一斉に、共同墓地を包囲してい

た者たちが草叢から立上った。

「あつ」白岩由吉は思わず声をあげた。

急に現われた案山子（かかし）の軍団だった。みんな棒のように体を固くして立っている。

「ここで、なにをしてるだ？」

「はあ？おらあ、乞食（ほいど）で、それでえ
…」

「名前と在を名乗れえ」

「おらは大釈迦の佐藤千代吉つう者だア」

「嘘つぐでねえ。おめごとよーぐ知ってるもんがすぐ来るから待ってる」

そのままの対峙が三十分も続いた。身を翻せば逃げられると思った。その気迫に押されたか、小隊長は包囲網をせばめ、人垣を作って彼の逃げ口を防いだ。他の事件で、参加の遅れた青森署の高畑刑事が駆け付けた。

「おい、白岩由吉！おらにあいさつぐれえしたら、どうだあ」

「こいだば、逃げられねな。へへ」

同時に、後にいた男が白岩を羽交い締めにし、他の男が腕を捻じ上げていた。

「神妙に縄につくだあ」

時代劇のような台詞だったが、昭和の初頭の頃、まさに捕縛（ほぼく）のことばにぴつたりの大捕物劇は呆気なく幕を閉じた。

もつとも、白岩由吉にとつては、この捕物劇は、大脱獄囚として名をあげる序幕でしかなかった。

この時、彼は「ああ、これでちゃんと飯が食える」と思った。自分が死刑になる身であ

るかも知れないことには思いが行かなかつた。
。山中をさまよい歩いた三日間が、体力の消耗もあつて、かなり応えていたのである。

(第三章 了)